めくる、めぐる、富山な暮らし

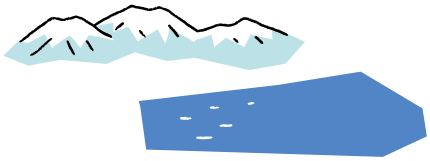
とやま日季（にっき）

2010 夏秋号

くらしたい国、富山

表紙の写真

藍色の富山湾と立山連峰



富山湾越しに、3000m級の立山連峰が浮かぶ、世界でもまれな光景が広がっています。

「あいがめ」と呼ばれる深い海底谷を刻む富山湾の藍色と、白い雪を頂く山々のコントラストも見事です。

四季折々に様々な表情を見せ、高くそそり立つ立山連峰は、富山の人々にとっては、大切なこころのよりどころ。

海に山に、豊かな自然に恵まれた富山の魅力は、尽きることがありません。

もくじ

2 表紙の写真
とやまカルチャー
富山湾と立山連峰
富山県水墨美術館

3 おいしい暮らし
案内する人 桝田 隆一郎 さん

4 富山対談
映画監督 滝田洋二郎 × 富山県知事 石井隆一

8 とやま暮らし日季
おわらのまち八尾から 手作りのある暮らし。

14 とやまストリーム
富岩水上ライン就航1周年

15 このまちに住みたい。
南砺市

16 東京で、富山に逢える。
いきいき富山館

いいモノ、いいコト。
富山米 コシヒカリ

とやまカルチャー

富山で知る、日本の美。

富山県水墨美術館は、自然に囲まれた静謐（せいひつ）な佇まい。「水墨」を入り口に、日本の風土と永い伝統の中で育まれた絵画や工芸など、多彩な日本文化の美を楽しめる極上の空間となっています。国宝級の作品を鑑賞できる企画展から、知られざる作家に光を当てた意欲的な展示まで、県内外から多くの人が訪れています。喫茶コーナーや風情豊かな茶室は、観覧料は不要です。美しい日本庭園を眺めたり、洗練された空間を楽しんでみませんか。

菱田春草「竹林」屏風 二曲一隻（1909年頃）

常設展示では、近代日本を代表する富岡鉄斎や横山大観、竹内栖鳳、菱田春草をはじめ、富山県砺波市出身の画家・下保昭の水墨作品を展示し、個性豊かな画業を紹介しています。

富山県水墨美術館
富山市五福777番地　Tel.076-431-3719
開館：午前9時30分～午後5時（入館は午後4時30分まで）　休館日：月曜日（祝日はのぞく）、祝日の翌日、年末年始（臨時休館・変更の場合有り）

食にまつわる、リレーエッセイ

おいしい暮らし

案内する人
桝田 隆一郎 さん

おいしい物と感動する物、なんでもある富山。

ここにある、食べ物が好きで、人が好きで、ここが好きになった人たち。出身も年齢も異なる人たちが「富山の旬のおいしいもの」を囲む至福のひと時。

日本酒の国際化に伴い、海外で日本酒を楽しむ会に招待される事が増えた。その前後は美味しい物を求めて仲間と食べ歩く。どこで食べても「おいしい物」が出てくることは多い。しかし「感動する物」に出会う事はめったにない。

いかに力のある素材を探しだし、活かすか。いかに人を喜ばす事に執念を持つ料理人に出会うか、だと思う。

海鱒（ウミマス）の塩焼き、活メのブリ、カサゴ、カレイの透明感のある刺身、ノドグロの煮漬け、巨大な岩ガキ、カニやアワビのしゃぶしゃぶ、カワハギの肝、生きているエビは刺身か半生で。立山連峰から雪解け水が大量に注ぎ込む富山湾は、同じ魚でも魚の力が断然深い。

深い雪に閉ざされる山の気を吸ったススタケの炭焼き、ウドの大吟醸粕漬け、コゴミゼンマイの昆布〆、精神までもが清められる御馳走である。

百川と言われるくらい多い急流からはアユ、イワナ、1メートルを超えるウナギの脂の旨さ。ドングリをたくさん食べたイノシシ牡丹鍋の美味しさ。

富山にはまさに感動するものが「なんでもある」。力のある素材は料理人にも「美味しく活かせ！」と魚のメ方、エビの鮮度、火の入れ方、シンプルに熱々で、冷や冷やでと、「食の美意識」を求める。

最近では当酒蔵にも日本中から、そして、世界からも食に関心の強い来客が多くなった。欧州の食ジャーナリスト、ロシアの銀行家、香港のワイン王、米国のヘッジファンド関係者。世界中の美食を食べ歩いた者たちが、口を揃えて「富山はガストロノミ（美食）の天国だ」と絶賛してくれる。

美味しい物にはおのずから人が集まる。我が岩瀬にも愉快な若い職人が集まってきた。

友人、客人、仲間と食べ、飲み、語る時、富山の恵みに感謝、感動である。

桝田隆一郎

ますだ・りゅういちろう
富山を代表する酒蔵のひとつで、「満寿泉」で知られる株式会社桝田酒造店、代表取締役。
http://www.masuizumi.co.jp

映画「おくりびと」で、
人の尊厳や家族の絆をユーモアを交えて描き、
見事、米国アカデミー賞を受賞した滝田洋二郎監督。
石井隆一富山県知事とともに、ふるさとへの思いや、
映画を通じた富山の魅力発信について語り合いました。

あしたへ、つなぐ 富山対談

映画監督
滝田洋二郎

×

富山県知事
石井隆一

富山県での原体験が自然と、映画「おくりびと」に描かれている

石井　滝田監督は、映画「おくりびと」でアカデミー賞の外国語映画賞を受賞されました。私も2度ほど拝見しましたが、本当にすばらしい映画ですね。「人の死」というテーマを取り上げながら、ユーモアもあり、あまり重くならないようにされているのも滝田監督ならではのお知恵のように思います。

「人の死」というテーマについては、富山県在住の青木新門さんが『納棺夫日記』を書いておられます。

同じくこの貴重なテーマを、滝田さんご自身も、富山県出身ということもあって、監督として、どのように、映画で表現したいと考えられたのでしょうか。

滝田　まず一番大きなきっかけは、自分がいままで映画の題材として考えもしなかった「死」というテーマを素直に見つめることができたということですね。人は必ず死ぬわけで、僕自身も、いろんな方との別れをしなければならない年代になってきました。そうすると、棺のなかにご遺体を入れているのは誰かも考えない問題があるんですよね。人間は死を遠ざけたがるものですが、職業的興味からも、逆に人がのぞかない世界をのぞいてみたいということはありましたね。

それに、18歳まで富山にいましたが、富山では死は生活の中に自然とありましたね。母方のおばあちゃんが亡くなった時も顔の白い布をはがして叱られたこともありました。だからこの題材は、富山県で育った自分にとっては

すごく近い何か、理屈抜きに惹き付けられるものがあったんです。納棺師の仕事だけでなく、どういう風にまわりの人が死を見つめるのかということに興味を持ちました。

石井　映画は実際には山形県で撮影されていますが、やっぱり監督が富山県で生まれ育った視点や感性が、いろんな場面で生きているんでしょうか。

滝田　それはもう、どの映画もそうですが、自分が育った原体験からは逃れることができないと思いますね。特に「おくりびと」の場合、富山で僕が見てきた場所、土地、人に近づいてしまうということがありました。自分の目を通して、やっぱり富山県のことを描いているんですね。それに、僕の子どもの頃は時代ものんびりしていましたね。何につけても、すべての人が喜怒哀楽に正直であるという、人間らしさがありました。大人がおおらかだったということでしょうかね。

石井　最近は、少し子どもたちに構い過ぎている感じもしますね。

滝田　そうですね。子どもの頃のいろんな体験や感情というのは、絶対に忘れないものです。僕自身、40代後半、50代になってから、だんだん富山に惹かれていくのも不思議ですね。シャケのように、戻るのかなと（笑）。

石井　「おくりびと」は、重いテーマなのに、こころが和むようなユーモアがあります。「釣りキチ三平」でも、例えば、元々、釣り三昧の三平を心配して、東京に連れ戻そうとする姉の愛子が、

巨大イワナと必死に格闘する三平を応援しようとストールを投げ、それがイワナをおとなしくさせるといった場面なども含め、つい微笑んでしまうような場面がいくつかありますね。あれは滝田監督が、意識して工夫されているんですね。

滝田　たぶん自分の資質だと思います。僕は商売屋の子どもですから、小さい時から、配達や集金を手伝うと、いろんな人がいるわけですね。昼間は怖い人が、夜に酒を届けると妙にやさしかったり。人の様々な側面を見て、人間は、結構滑稽なんじゃないかと。表の顔は、実は嘘なのではないかというのは、小さい頃からずっと感じていましたね。特に、シンボリックなものには、絶対裏があると思っています。

　映画でも表と裏が、同じ枠のなかに入った場合に、滑稽さが出るのだと思います。「おくりびと」の撮影の前に僕らスタッフは、山形で実際の納棺の現場を、いくつか経験させてもらいました。すると、悲しみの中ではありますが、その方との一番の思い出を語り合いながら、人は笑うんです。その人の人生を祝福するんですね。その感情の流れの多様さに、死というのは、悲しみだけではない何かを残してくれるということをすごく感じました。人間は悲しみと、おかしさ、滑稽さが同居する動物なんだと思います。

石井　すばらしい作品でアカデミー賞もとられ、人生観の変化や、監督としての新たな決意はありますか。

滝田　「おくりびと」は日本よりも先に海外で認められました。そして日本映画人にとっては雲の上のアカデミーまで、映画そのものが連れて行ってくれました。世界の約70カ国で公開して、100以上の賞をいただきました。映画の持つ大きな力というものを、まざまざと見せつけられたことに感謝したいですし、これからも、ちゃんと映画に向き合わなければならないということは、強く感じましたね。

石井　芸術文化の世界では、国内では必ずしも評価が十分されないままで、欧米で先に高い評価を受け、それを契機に国内でも正当に評価されるというケースが少なくないと聞きます。富山県にゆかりの方で言えば、利賀村を拠点とし、シアター・オリンピックスなどの中心メンバーとして国際的に活躍されている鈴木忠志さんや、利賀山房、野外劇場、立山博物館を設計され、ヴェネチア・ビエンナーレ建築展のコミッショナーなども務められている建築家の磯崎新さんなどもその例のように思います。私たちも、新しい試み、先端的なものも含めて芸術文化を楽しむとともに、本物を見極める眼力を磨いていきたいですね。

石井隆一

いしい・たかかず／富山県知事

東京大学法学部卒。石川県、北九州市、静岡県などを経て、地方分権推進委員会次長、総務省自治税務局長、消防庁長官などを歴任。平成16年より現職。平成15年から18年まで早稲田大学大学院客員教授。主著に『分権型社会の創造』など。

富山県をもっと、映画の舞台に

石井　改めて、ふるさと富山県の魅力についてお聞かせいただけますか。

滝田　東京からみると、富山は何もないところだという言い方をしますよね。東京の基準、あるいは都会の基準からみて何もないと。逆に見ると、富山にあるものは、東京には何も無いということですよね。変わらない大自然、おいしい水や空気。富山県はすごいよと言わなくても、必ずすごさがわかる時期が来る。黙して語らずという戦略もあると思います。みんなすぐに答えを出したがりますが、早く出した答えほど、早く忘れられるわけですからね。

石井　ここ数年、富山の自然の雄大さ・美しさや、食べ物のおいしさ、人情も温かいなどの良さが徐々に知られてきて、台湾や韓国・香港・中国等からの外国人観光客は、5年で5.5倍と大幅に増えています。特に暖かい国の方は、「雪の大谷」の雪の壁に憧れて来られますね。また、欧米からの観光客も徐々に増えており、うれしいことです。

　滝田監督は全国各地で撮影されていますが、映画の撮影地として見た場合の富山県の魅力はいかがですか。例えば木村大作監督の「劔岳 点の記」は大ヒットしました。最近は、「ほしのふるまち」という青春コミックを原作とし、氷見を主な舞台にした映画が、須藤プロデューサーのご尽力もあって、製作されています。

滝田　映画でも、いま物語は、個人の物語が多く作られています。都会の話なんかより、やっぱり人間味あふれるローカルがいいんですね。

石井　7月末、南米訪問の際にニューヨークに立寄りましたが、本当の日本を知るためには、もう東京や京都・大阪でなく、富山県を含めて、もっと地方を体験したいというお話を伺いました。

滝田　富山には立山連峰をはじめ、たくさんの魅力がありますね。でも、映画を撮るときは、富山でなくてはならない物語が必要です。富山で撮る動機とは何かということが一番大切で、ストーリーや台本に、その場所でこそ感動するものがあるかが大事なんです。

　例えば僕にとって、故郷の福岡町というのは、ドラマだらけです。いくらでも撮れる。それは、こころを動かすものがあるからです。ただし、実際に僕が富山で撮るとなると、かなりプレッシャーもありますが(笑)。富山の物語でもう一度世界に出られれば、それが一番すばらしいことだと思います。それには文学や様々な芸術、音楽も含めて、富山発のものには、どんなものがあるかということを知りたいですし、富山から強くメッセージしていくことが大切だなと思います。

ふるさと文学館から富山県の魅力を発信したい

石井　本年から、ふるさと文学の振興のための「ふるさと文学館」(仮称)を、この3月に廃止した知事公館の建物や敷地を活用してつくる準備を進めています。最近、中国、ロシア、ブラジルなどを訪問して、改めて私たちが、グローバル化の滔々たる流れの中にあることを実感しました。他方で、だからこそ、自分の生まれ育った地域、豊かで美しく、かつ厳しさもある自然や、そこで苦闘してきた先人の歴史や文化などに愛着や誇りを持つ人であることが大切です。ふるさとや、そこで育った自分のことをきちんと語れることが国際社会での人間的な魅力や信用につながります。若者を含め、幅広い県民の皆さんに親しんでもらえるように、純文学だけではなく、映

像やマンガ、アニメも含めて、富山県の文学的な魅力や、芸術文化に関連する情報を発信していきたい。

約１３００年前に大伴家持が富山県に国守として赴任し詠んだ、２２３首もの秀歌が万葉集に登載されています。現代では、例えば角川源義さんや辺見じゅんさん、田部重治さん、堀田善衛さんなどの多くの優れた著作があり、また、柏原兵三さんの『長い道』や宮本輝さんの『蛍川』については、各々、映画化もされています。滝田監督のご業績も常設展示のほか、いずれ企画展などでご紹介したいと思っていますので、ぜひ、ご指導とご協力をお願いしたい。

滝田　どうやって映画ができていくのか、生み出す過程での苦しみを紹介したり、現役の映画人にもたくさん来ていただいて、触れ合いの場を作れるといいですね。そして何よりも、個人の想いや情熱によって無から新たな物語が創られていく喜びを皆が身近に感じて、夢を見ることのできる文学館になればいいですね。

石井　そうですね。華やかな成功の影には、種々の困難があり、試行錯誤があるということも伝えたいですね。次の時代を担う若い人達に、ふるさとに関心を持ち、自分のアイデンティティというものを確立して、前向きに生きてもらう、その一助になればと思います。

滝田洋二郎

たきた・ようじろう／映画監督

富山県高岡市福岡町生まれ。85年「コミック雑誌なんかいらない！」で一躍注目を集める。代表作に「木村家の人びと」「僕らはみんな生きている」「陰陽師」「壬生義士伝」「バッテリー」等。「おくりびと」で米アカデミー賞外国語映画賞受賞。

フィルムコミッションで映画を応援

石井　また、富山県ではフィルムコミッションの設立についても検討しているところです。県内には、既に高岡市や南砺市にフィルムコミッションがあり、映画「８月のクリスマス」などでは高岡市が、テレビドラマの「不毛地帯」では富山市の電気ビルがロケ地となりました。

「劔岳 点の記」や「ほしのふるまち」などの例を見ていても、映画製作によって、経済面の活性化だけでなく心の活性化や元気につながるんですね。今後の設立に向けて、また富山県をロケ地としてアピールするために、何かアドバイスをいただけますでしょうか。

滝田　「富山県は映画を応援します」という知事の一言で、いいのではないでしょうか。そして、地域のみなさんもフィルムコミッションなどを通して映画製作の経験やノウハウを積んで、富山県の多彩なイメージを売り込んでいくことが大切だと思いますね。

誰もがこころの拠り所を求めている時代に、ほっとできる富山県というのは、何物にもかえ難いすばらしい所だと思います。富山の皆さんも、いろんな視点から富山を見て、いろんな人や物事とのつながりをつくり、チャレンジしてほしいと思いますね。

石井　これから健康に留意されて、ますますご活躍下さい。いずれは、ぜひ、富山県を舞台にすばらしい映画を作っていただければありがたいなと思います。

「おくりびと」

故郷で、偶然、納棺師の仕事に就いた本木雅弘演じる小林大悟を主人公に、人間の死や尊厳、家族の絆をユーモラスに描いた作品。米国アカデミー賞外国語映画賞をはじめ国内外の賞を多数受賞。

とやま暮らし日季

おわらのまち八尾から 手作りのある暮らし。

人形作家／八尾在住 鵜飼文代さん

格子天井も見事な、かつての農家で暮らす鵜飼さん。鵜飼さんの作る人形の表情に惹かれて習い始めたという生徒さんに、人形制作の工程を丁寧に指導。

おわら風の盆のまちで見つけた、こころの宝物。

富山県富山市八尾（やつお）町は、「おわら風の盆」で知られる坂の町。この町の魅力に引き寄せられた人がいます。

滋賀県生まれの鵜飼文代さんはアンティークドールを制作し、富山県内数カ所で教室を開く人形作家。20年前、京都に住んでいた頃にストレスから体調を崩し、雪国に憧れて富山の旅へ。旅の途中で訪れた八尾町の佇まいや自然に、一目で惹かれ移住を決意します。

「最初は、八尾やおわら節のことはまったく知らなかったんです。でも、水はおいしい。そばはおいしい。素晴らしい町並みや自然がある。住み始めてから知ったおわらも、私にとって、ものすごいプレゼントでしたね」

鵜飼さんは、八尾町の旧町にある上新町（かみしんまち）で家を借り、人形教室を開きます。やがて、一年を通しておわらに打ち込む八尾の人々の熱い思いに触れ、洗練された八尾の文化、その奥深さに魅了されていきました。

「八尾に住んでいるからこその醍醐味をたっぷりと味わうことができました。おわらにしても、やっぱり明け方のおわらが一番素敵だと思うんです」

喧噪の消えた明け方の町で静かに舞う踊り手。独特の節で情感を込める唄い手や、三味線、胡弓、太鼓の地方（じかた）たち。ぼんぼりの灯りや、祝いの門幕、水芙蓉が彩る幻想的なおわら風の盆の世界。

「寝床でおわらを聞いたり、上質な浴衣や着物姿でおわらを楽しむ八尾の大人達を見るのも格別です。お客さまを招いても、みなさん感動して泣きそうになると言われるほどなんですよ」

現在、鵜飼さんは旧町からほど近い、山の上の農家を購入して暮らしています。でも、町なかで過ごした8年間は、いまも大切な心の宝物となっているとか。そして、八尾の魅力は、おわらの他にも、まだまだあると鵜飼さんは語ります。

アンティークドールや市松人形を、すべて手作りで仕上げていく。

一帯に広がる棚田を見下ろす山西さんと鵜飼さん。眼下には、アユやイワナ、ヤマメが泳ぐ野積川が川面を輝かせる。晴れた夜には、満天の星が降り注ぐ別天地。

鵜飼さんが以前暮らした八尾の旧町。井田川沿いに高く積まれた石垣の上に連なる家並が魅力。

鵜飼文代

うかい・ふみよ／人形作家

1989年、横浜市ギャラリーパリスで初個展。1990年、京都から八尾町に移住。富山市民プラザ他で人形教室を開講。プチポアンという刺繍を創作に活かそうと勉強中。

里山や町なかで出逢う、すこやかなうれしさ、手仕事への誇り。

鵜飼さんが暮らす家の周辺には、日本の棚田100選に選ばれた「みのり棚田」が広がっています。ここは晴れた日には立山連峰を望む、絶景の地。

「暮らしの中に、この風景があるってすごいでしょ。夏にはホタルが舞って、流星群を一晩中眺めたことも。ある程度歳をとったら、やっぱり田舎がいい。静かな暮らしが、とても楽なんです」

近所に住む山西陽作さんは、「みのり棚田」を舞台に、町内外の人が農業を体験できる「みのり棚田の学校」を運営。棚田の美しさ、良さを多くの人に知って欲しいと活動に取り組んでいます。

「田植え、稲刈り、野菜の収穫、草木を使った素朴な遊びの伝承など、多彩な体験を通して、子どもも大人も、街の生活では得られない充実感を味わってほしい」と、熱い思いを語ります。

「都会の人も、地元の人も、八尾の素晴らしさを再発見できる機会にしたい」と、「学校」の未来に期待を込めます。

井田川のそばにある小学校を移築した趣のある桂樹舎和紙文庫。館内では、世界の紙工品などを展示している。鮮やかな型染め和紙の工芸品も販売され人気だ。和紙の製造工程見学や、予約すれば、紙すきも体験もできる。

風庵

富山県富山市八尾町諏訪町2444
TEL.076-455-3848　11:00～14:00／17:00～20:00　月曜定休（祝日の場合は翌日）

八尾産のそば粉100%で、石臼挽きの本格手打ちそばが美味と評判。

桂樹舎和紙文庫

富山県富山市八尾町鏡町668-4
TEL.076-455-1184　開館9:00～17:00　入館料：和紙文庫500円、子供250円　休館日12月29日～1月10日

八尾には、手間ひまを掛けた手仕事を愛する人がいまもたくさんいます。

かつて八尾の山間部の農家で冬場の仕事として盛んに作られていた手すき和紙。良質で丈夫な「越中和紙」として、富山の売薬の膏薬紙・袋紙・包装紙などにも使われていました。

その伝統を受け継ぐのが、桂樹舎和紙文庫です。鵜飼さんも、県外の友人たちを必ず案内するというお気に入りの場所です。桂樹舎社長の吉田泰樹さんは、「八尾独自の型染め和紙・八尾民芸紙の良さを、多くの人に知ってもらいたい」と意気込みを語ります。

鵜飼さんと吉田社長は、毎年開催される、民家を会場にした「坂のまちアートinやつお」で、作家と運営役員として活躍。今後も多くの人と交流し、町の活性化につなげていきたいと話します。

また、八尾の楽しみとして大きいのが「そば」のおいしさです。評判の一軒「風庵」のご主人、乗山礼雄（のりやまれいお）さんは、おわらの唄い手としても知られ、風の盆では自前の着流しで町を流すことが、何よりの楽しみだとか。

手仕事を愛し、豊かな文化を日常の中で楽しむ人々。それが、八尾町の得難い魅力を生み出しているのです。

地元の通人に聞きました。奥深い、おわらの楽しみ方とは。

毎年、9月1日から3日間、全国から大勢の人が訪れる「おわら風の盆」。八尾おわら保存会の古川克己さんは、より深く楽しむには「前夜祭や、普段のおわらを楽しんでみては」と語ります。

3日間の本番のために、1年をかけて練習を重ねるのが八尾の人々。夜に八尾の旧町を散策すると、「エンナカ」とよばれる用水の流れる涼やかな音とともに、どこからともなく唄声や三味線、胡弓の音色が聞こえてきます。

「町の空気と一体となった、素朴なおわらの良さを間近で感じてもらえたらと思いますね。本番を迎えるまでの過程を知ることで、日々、磨かれていくおわらの良さ、伝統を受け継いでいこうとする私たちの思いを肌で感じてもらえるのではないかと思います」

まちに、人に、風土に磨かれていくおわら風の盆。

●風の盆ステージ：毎月第2・第4土曜日に定期開催。楽器演奏、舞台演舞、輪踊り参加などを、個人・団体ともに予約無しで楽しめる。 会場＞越中八尾観光会館ホール　13:30〜14:30（13時開場）●お問い合わせ：越中八尾観光協会　富山市八尾町上新町2898-1　TEL 076-454-5138
http://www.yatsuo.net/kankou

八尾の町は三日三晩、艶やかなおわら色に染まる。編み笠に揃いの浴衣と黒帯姿でただ一心に舞う。優雅に、時に大胆に。若き想いが、町の熱気となる。

八尾スローライフ

そば打ち教室で、八尾のおいしいそばを堪能。

八尾の山間部の各地域では、様々な農業体験が楽しめる。

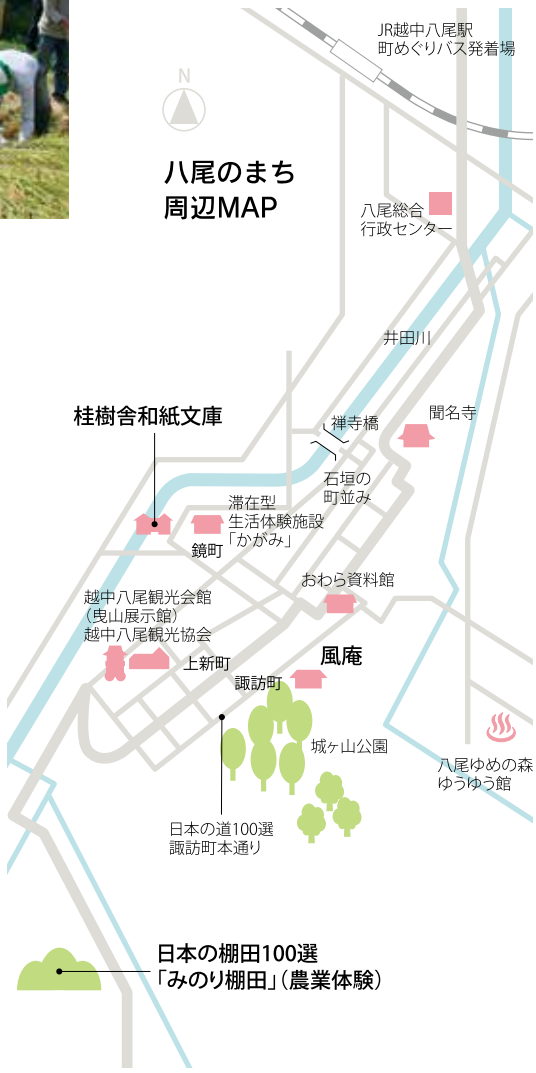
田植えから冬野菜の収穫まで多彩。

川でイワナを捕まえて遊んだり。

棚田100選の田んぼで、いい汗を。

田舎暮らしは、
やっぱり、おいしい。

八尾は、いくつもの尾根が連なり、川や谷が集まる場所。「八」には、たくさんという意味があります。その豊かな自然のなかで育まれてきた里山の暮らしを、あなたも体験してみませんか。春の田植えや、秋の稲刈り、野菜づくり、キノコの収穫、さらにそば打ち体験など。大人も子どもも気軽に楽しめて、しかも、穫れたてのおいしさを堪能できる体験メニューがいっぱいです。



八尾暮らしを、
肌で体験してみませんか。

八尾への移住・定住に興味のある方は、普段の八尾暮らしを体験できる、滞在型生活体験施設「かがみ」を利用してみませんか。おわら風の盆や曳山祭が行われる本通りに近く、観光施設もすぐそばに。川のせせらぎが聞こえるのどかな一軒家です。自然と伝統文化が息づく八尾の「かがみ」を、ぜひご利用下さい。
(富山市内在住の方、観光目的でのご利用はできません。)

「かがみ」専用ダイヤル

TEL.076-454-6301
FAX.076-454-6321
お電話での問い合わせは、
平日の午前9時～午後4時まで。

越中八尾観光協会

富山市八尾町上新町2898-1
TEL 076-454-5138
http://www.yatsuo.net/kankou

富岩（ふがん）水上ラインは今年7月に就航1周年を迎え、7月3日に記念イベントが行われました。

富山駅北の富岩運河環水公園から、全長7.5キロの富岩運河をクルーズする「富岩水上ライン」。太陽光発電で動く日本初の旅客船「ｓｏｒａ（そら）」と電気ボート「もみじ」の2隻があり、環境にも水辺の生き物たちにもやさしい船として、就航以来人気のスポットとなっています。

記念イベントでは、石井知事の挨拶や来賓の祝辞の後、関係者とｓｏｒａのシップベル制作に携わった園児たちがくす玉を割って祝福。天門橋の南側には白鳥をかたどった氷のベンチが造られ子どもたちの人気を集めたほか、移動販売車の登場など、縁日気分を盛り上げました。「就航1周年記念限定航路」も設けられ、普段通ることのできない小運河を特別に運航。小運河横の野外劇場では水辺のコンサートが行われ、環水公園に演奏が響きわたりました。

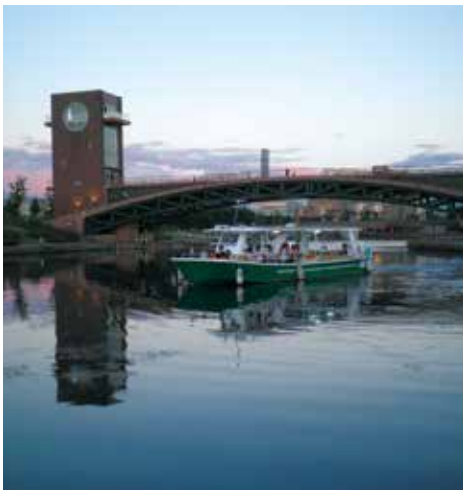
また、8月中旬には「夕涼み運航」を実施。暑さも和らぐ夏の夕暮れに、ライトアップされた橋をくぐり、幻想的な運河の回遊を楽しみました。

●運航日：平成22年11月28日(日)までの土・日・祝日●運航ルート：土曜日＞環水公園～中島閘門　日・祝日＞環水公園～中島閘門～岩瀬カナル会館●乗船料金：環水公園～中島閘門（片道20分）大人片道500円　中島閘門～岩瀬カナル会館(片道60分)大人片道1000円　環水公園～岩瀬カナル会館(片道90分)大人片道1500円　※小人(小学生)は、大人の半額。小学生未満は、無料。　※往復割引2割引●アクセス：JR富山駅北口より環水公園まで徒歩10分●運航に関するお問い合せ：新日本海重工業株式会社TEL.FAX.076(437)9272　学習支援船運営委員会(富山県・富山市)　富山県地域振興課TEL.076(444)4116　富山市中心市街地活性化推進課TEL.076(443)2054●http://fugan-suijo-line.jp

とやまストリ…●ム

富岩水上ライン就航1周年

環水公園で人気の船旅が開始から1年。
夏の夕暮れに、水面の風を感じながら。



このまちに住みたい。

私たちが住む市町村の安心を、お届けします。

南砺市井波

南砺市

生涯をしあわせに過ごせるまちへ。

富山県の南西部に位置する南砺市（なんとし）。市内には世界遺産の「五箇山の合掌造り集落」や、木彫で知られる井波、越中の小京都・城端などがあり、豊かな自然や歴史・文化遺産に恵まれた風光明媚なところです。

県内でも高齢者の割合が高い地域ですが、病院や診療所、訪問看護ステーションなどが連携して、高齢者が安心して在宅で過ごせる地域医療が進められています。南砺市の訪問看護ステーションが行っている在宅での看護やリハビリ、介護の訪問回数は県内トップクラスです。今後もさらに、地域に合った医療を考えようと設立されたのが、「南砺の地域医療を守り育てる会」です。富山大学附属病院の山城清二教授らが中心となって、医療従事者と住民が集まり、これからの医療体制や住民の意識づくりについて、共に学び、意見を交換しています。

医師不足などの中での地域医療の確保や若手の「総合医・家庭医」の育成を目標に、住民、医療機関、行政などが一体となって取り組む活動が始まっています。

東京で、富山に逢える。

富山県アンテナショップ

いきいき富山館

東京都千代田区有楽町2-10-1 東京交通会館Ｂ１Ｆ
10:00～19:00（日・祝 18:00）
物産TEL.03-3213-1244　観光TEL.03-3231-5032

●JR有楽町駅前（京橋口・中央口）すぐ
●東京メトロ有楽町線有楽町駅Ｄ８出口

酒とかまぼこフェア

11月3日（水・祝）［東京交通会館12F　カトレアサロンA］

15の蔵元から約80種の地酒と、10社から約90種の富山名産のかまぼこが一堂に勢揃いします。ぜひこの機会に味わってみてください。前売券1500円発売中。

魚津うまいもんフェア

11月6日（土）～ 7日（日）［交通会館マルシェ、物産館］

「蜃気楼が見える街」魚津が自信をもってお届けする特産品が大集合！海の幸・里の幸の試食販売を実施します。

メルヘンおやべ うまいもんてんこもりフェア

11月26日（金）～28日（日）［物産館］

歴史に名高い源平合戦の倶利伽羅古戦場がある小矢部市から、自慢の食品・加工品を販売します。

※日程・内容など変更になる場合があります。

いいモノ、
いいコト。

いよいよ新米の季節の到来です。たわわに実った富山のコシヒカリは、9月上旬から収穫が始まり、やがて全国へと出荷されていきます。今年もしあわせに満ちたおいしさで、あなたにお届けします。

JA全農とやま
https://www.ty.zennoh.or.jp

富山米 コシヒカリ

いい水と人の大地から。

もちもちっとして艶やかな富山のコシヒカリ。ひとくち頬張るごとに、おいしいしあわせが、こころと体に染みわたります。

全国のコシヒカリの中でも高い人気を誇る富山のコシヒカリ。そのおいしさの秘密は、立山連峰をはじめとする山々からの「豊かで冷たい水」と、田植えから収穫まで手間を惜しまない「勤勉な県民性」、そして、高品質のお米を安定して育てる「高い技術力」にあります。

温暖化が進む中、品質が低下するのを避けるため、夏場の早い時期に穂が出ないよう田植え時期を遅らせるなどの対策がとられ、毎年、高い一等米比率を誇っています。

豊かな自然と人の力から生まれた富山米・コシヒカリを、ぜひご賞味下さい。

プレゼント　アンケートにお答えいただいた方の中から抽選で５名様に、富山米・コシヒカリの新米5kgをプレゼントします。

とやま日季　2010　夏秋号　2010年9月発行　企画・発行：富山県地域振興課　〒930-8501　富山市新総曲輪1-7　TEL076-444-9605　FAX076-444-4561

富山県